崩れ落ちる鐘 "The Bell-Tower" 論

相原成史

●要約

本論では1955年に発表されたハーマン・メルヴィルの "The Bell-Tower" に見られる機械文明批判を読み解く。

作品の主人公バンナドンナは国家の命を受けて、イタリア随一の鐘塔建設を行う。彼は優れた技術者であるだけでなく、稀有の芸術家でもあったが、国家の援助と民衆の後押しのもと次第に傲慢になり、ついには職人の一人を塔建造の障害になるとし殺害してしまう。国家は塔建造を進めるためそのことを不問とするが、最終的にバンナドンナは自分が作った自動鐘撞き人形に頭を打たれ死んでしまう。そしてその後、塔自体も鐘の重みに耐え切れず崩壊する。

多くの批評家はこの作品をホーソーン風のアレゴリーと解釈し、人間の傲慢に対するメルヴィルの警鐘と捉えるが、この作品の意義はそれだけにとどまらない。機械文明の発達に伴い、19世紀のアメリカは「マニフェスト・デスティニー」の旗印のもと国土拡張を進め、帝国主義化していくが、メルヴィルはこの作品において、その帝国主義を批判していると考えられる。本論では "The Bell Tower" においてメルヴィルが行っている、機械文明批判、帝国主義批判を明らかにしていく。

●キーワード

ハーマン・メルヴィル

"The Bell-Tower"

アメリカ合衆国

文明批判

帝国主義批判

I

18世紀初頭のアメリカはまさに機械による工業化の時代であった。農機具の機械化が始まるとその製造が拡大していく。さらに1830年代初頭に無煙炭が出現すると、蒸気機関用の安価な燃料が提供され、その勢いはますます増大していく。そしてほぼ同時期に蒸気機関車の運行が始まり、鉄道網が整備されていくことになる。鉄道網の拡大により、それまで生産性の低かった地域で生産が増大するとともに、鉄道の車輪や機関車の製造といった新たな産業も生まれ、それが国家経済においても大きな役割を果たしていくことになる。そしてこの鉄道網の拡大が「マニフェスト・デスティニー」というモットーのもと行われた、国家の強引な領土拡大に大いに貢献したのである。そしてアメリカでの鉄道建設は1850年代にますます盛んになっていくが、"The Bell-Tower" はこのような時期に書かれた作品である。

メルヴィルの小説には機械文明を批判していると思われる箇所がある作品は多い。"The Paradise of Bachelors and the Tartarus of Maids" においては、製紙工場で機械に使われる乙女たちの病的な姿が描かれ、また "Happy Failure" においては荒唐無稽な灌漑用水機を作った男の失敗談がユーモラスに描かれている。機械文明批判が直接の主題となっていない場合でも "Cock-A-Doodle-Doo!" の中に見られるように、機関車や蒸気船の事故を憂う描写が出てくる。

> What a horrid accident was that on the Ohio, where my good friend and thirty other good fellows were sloped into eternity at the bidding of a thick-headed engineer, who knew not a valve from a flue. And that crash on the railroad just over you mountains there, where two infatuate trains ran pell-mell into each other, and climbed and clawed each other's back; and one locomotive was found fairly shelled, like a chick... (1)

ここで語られる蒸気船と蒸気機関車の事故は機械を操作する人間の過失から起きたものである。メルヴィルは機械そのものを完全に否定しているわけではないと思われるが、操作ミスをする人間、機械に振り回される人間を語ることによって、また効率を求めるあまり、結果的に機械に使われてしまうことになる人間の愚かさを描きだすことによって、科学技術の進歩を盲目的に歓迎する人間に対して暗に警鐘を鳴らしているのではないかと思われる。しかし、メルヴィルが危惧しているのは、単に機械文明の問題だけではなく、その機械によってもたらされる、国家の傲慢な拡大路線にもあったのではないだろうか。そして、メルヴィルの作品の中でも機械文明を直接的にはっきりと批判していると思われるのが、1955年に発表された "The Bell-Tower" である。

この作品はさまざま問題を含んでいるにもかかわらず、同時期の短編 "Bartleby, the Scrivener" や "Benito Cereno" に比べると、論じられることが少ないように思われる。その理由としては、作品がルネッサンス期のイタリアを舞台にしていることや、ホーソーン風でメルヴィル的ではないと解釈されてきたためかもしれない。R.B. ビクリーは「メルヴィルが最も明白にホーソーン流の書き方で、アレゴリーを書こうとした試み」(2) と指摘し、B.L. グレンバーグも作品の主題や登場人物、結末が "Birthmark" の焼き直しであるとし、やはりホーソーン風のアレゴリーだと解釈している (3)。ではこの物語から読み取れる教訓とはいったいどんなものなのであろうか。それは冒頭部の次の一節から読

み解くことができるであろう。

> Like Babel's, its base was laid in a high hour of renovated earth, following the second deluge, when the waters of the Dark Ages had dried up, and once more the green appeared. No wonder that, after so long and deep submersion, the jubilant expectation of the race should, as with Noah's sons, soar into Shinar aspiration. (4)

この物語は「暗黒時代」が終わり、神の天地創造の意図や神の創造した全宇宙の体系から人間が解き放たれ、自らの意思で活動しようとしたルネッサンス期が舞台であり、鐘塔建設はその活動の象徴であったということがわかる。そしてその鐘塔が倒壊は、「バベル」、「ノアの息子たち」、「シナルの野望」といった比喩から、人間の驕りが罰せられたということを意味すると考えられる。そして物語も次のように締めくくられるのである。

> So the blind slave obeyed its blinder lord; but in obedience, slew him. So the creator was killed by the creature. So the bell was too heavy for the tower. So the bell's main weakness was where man's blood had flawed it. And so pride went before the fall. (5)

この物語は人間の驕りを戒めるといった教訓を含んでいると考えられるが、その驕りとはいったいなんであったのか。バンナドンナが神になろうとしたことなのであろうか。

本論では "The Bell-Tower" を再読することにより、鐘塔の機械化を目指した主人公バンナドンナの芸術の影に隠れた醜い過ちとそれを許す国家の横暴、その決定に疑問を抱かない民衆たちを考察し、メルヴィルがこの作品で描こうとした人間の驕りとはなんであったのかを考察する。

Ⅱ

物語の主人公バンナドンナは才能あふれる技術者であたったと同時に芸術家でもあった。そして「自然と競い、凌ぎ、支配する」ことを目指し機械化された人形が鐘をつく仕掛けを持った塔を建設する。メルヴィルがトランセンデンタリズムの考え方に影響を受けているということは、間違いないと思われるが、この考え方を当てはめてみると、バンナドンナは芸術的な機械仕掛けの鐘塔を建設することによって神と「競い、凌ぎ、支配」しようとしていたことになる。これはエイハブが「真理」を追い求め白鯨＝神と対峙する姿を思い起こさせる。J.E. ミラーは「タジやエイハブやピェールと同様バンナドンナも超人的完全を求め、その代わりに死を迎える」(6) とし、G.M. スウィニーもバンナドンナを「最後のプロメテウス」とみなし、彼の死の中に、巨人的な野望や理想主義へのメルヴィルの批判が込められていると考えている (7)。しかし、バンナドンナをエイハブやピェールに代表されるような「真理」の探究者として捉えることは本当に妥当なことであろうか。エイハブやピェールは自発的な動機を持って自らの求める真理を追究し神と対峙していたのに対し、バンナドンナの狙いは「自然と競い、凌ぎ、支配する」ことであり、彼にとっては「人間とは真の神の別名」であった。つまり、彼は機械を作ることによって、自らが神になることができると信じていたので

ある。そこにはエイハブやピェールのような真摯な態度を感じることはできず、愚かな人間の傲慢さが滲み出ているように思われる。

> In firm resolve, no man in Europe at that period went beyond Bannadonna. Enriched through commerce with the Levant, the state in which he lived voted to have the noblest Bell-Tower in Italy. His repute assigned him to be the architect. (8)

交易によって裕福になった共和国がその威信を示そうと鐘塔の建設を議決し、バンナドンナは他に類をみない「堅忍不抜」さゆえに、その設計者とされたのである。彼はエイハブやピェールとは違い、自分の意思で目的に向かって進んだのではなく、国家によって指名されたに過ぎない。つまり彼は国家の援助なしには、自分の目的を果たすことはできないのである。そのことをバンナドンナ自身もはっきりと認識していると思われる。そことは次の出来事から推測される。

> Not without demur from Bannadonna, the chief magistrate of the town, with an associate − both elderly men − followed what seemed the image up the tower. (9)

彼は国家からの命を受けて鐘塔を建築していることを、つまり自分は任命された人物に過ぎないということを知っていたからこそ、自分以外の者は入れたくない塔の内部に二人の役人を入れざるをえなかったのである。

> **”**the poor mechanic will be most happy once more to give you liege audience, in this his littered shop...**”** (10)

しがない（poor）というような謙った言い回しをし、相手を持ち上げることによって、国家に対して従順であることを示そうとする。しかし肝心の「ハマン」を見せることはせず、その従順さが見せかけに過ぎないことがわかる。とりあえず自分の目的を達成するために従わなければいけない者には従っておくという、計算高さがバンナドンナにはある。エイハブやピェールが自発的な動機をもって「真理」を追求したのに対して、バンナドンナの場合は自分の、「自然と競い、凌ぎ、支配する」といった目的を追求するには、国家の手助けが必要であり、彼はその手助けを受けるためになら、自分をも卑下して見せるのである。またバンナドンナがエイハブやピェールと決定的に異なるのはバンナドンナには大衆の支持があったということだ。

> Those who of saints' days thronged the spot - hanging to the rude poles of scaffolding, like sailors on yards, or bees on boughs, unmindful of lime and dust, and falling chips of stone - their homage not the less inspirited him to self-esteem. (11)

多くの民衆が塔の下に集まり、見上げ、バンナドンナに対して敬意を払い、彼はそれを心地よく感

じるのである。

> At length the holiday of the Tower came. To the sound of viols, the climax-stone slowly rose in air, and, amid the firing of ordnance, was laid by Bannadonna's hands upon the final course. Then mounting it, he stood erect, alone, with folded arms, gazing upon the white summits of blue inland Alps, and whiter crests of bluer Alps off-shore − sights invisible from the plain. Invisible, too, from thence was that eye he turned below, when, like the cannon booms, came up to him the people's combustions of applause. (12)

そして塔の完成の日が来ると、国家はその日を祝日とし、大勢の民衆が集まり、賞賛の声があがり、このときバンナドンナは塔の上に立ち眼下を見下ろす。そして地上の民衆からは眼下を見下ろすバンナドンナの眼は見えなかったと書くことで、メルヴィルはバンナドンナが民衆の手の届かない高みにいると同時に、バンナドンナ自身が他の者を以下に見下していたかを表現している。

バンナドンナは塔の完成の後、鐘造りに入るが、鋳造には「貴族たちが公共のためにと寄贈した食器類」も大量に使われたのである。このことからも国家、民衆が一丸となり鐘塔造りにのめり込み、バンナドンナを支援していたことがわかる。また執政官が鐘の重さに対しての危惧を述べた時に、バンナドンナが耳を貸さず、そのまま作業が進んだことからも国家にとって彼がいかに特別な人間になっていたかということが伺える。

> The casting of such a mass was deemed no small triumph for the caster; one, too, in which the state might not scorn to share. The homicide was overlooked. By the charitable that deed was but imputed to sudden transports of aesthetic passion, not to any flagitous quality. A kick from an Arabian charger; not sign of vice, but blood. (13)

さらにバンナドンナが自らの目的を完璧に達成するために犯した殺人さえも、彼の偉業が「国家自体が敢えてそれを分かち合うことも辞さない勝利であると」見なされ、見逃されてしまう。裁判官は彼に無罪を言い渡し、聖職者は赦罪の申し渡しを行うのである。さらに鐘が完成すると、国家は鐘塔の完成とその建設者バンナドンナを祝うために、祝日まで設けるのである。

このことからバンナドンナが国家の繁栄の象徴となり、彼の驕りと堕落を国家と民衆が保護していると思われる。そこに見られるのは国を挙げての事業のためなら、一人の人間の命も顧みない国家の横暴であり、バンナドンナはその国家に庇護されて自分の目的を達成しようとする愚かな人間と考えられる。たとえ芸術的な目的を持っていたにせよ、彼の犯した行為は自らの、そして国家の保全を考えて、ビリー・バッドを死刑に導いたヴィア艦長と同種のものであろう。

H.B. フランクリンは *Billy Budd* 論の中で、「メルヴィルの作品すべてにわたり、作品読解の鍵となるような重要なイメージによって戦争と帝国主義に対する嫌悪感が表明されていると」(14) と述べているが、バンナドンナの、そして国家のこの横暴はメルヴィルが最も嫌悪する行為であったと考えられる。

Ⅲ

メルヴィルの短編の多くは一人称の語り手によって語られており、読者はその語り手の視点、物の考え方を通して物語を読んでいくことになる。しかし "The Bell-Tower" では全知全能の語り手が物語を進め、バンナドンナの鐘塔建設の動機やバンナドンナの死の原因などは、その語り手が一般市民の憶測を紹介するという形をとっている。そのため読者は語り手の考えを聞かされるのではなく、町の噂を聞かされることになる。"Bartleby, the Scrivener" などでは、一人称の語り手「私」についての情報が読者に与えられているため、語り手の発言の信憑性を読者が判断することができるが、"The Bell-Tower" では、読者は町の人々のさまざまな話を聞くことしかできない。したがって事の顛末は最後まで謎につつまれたままである。しかし、物語の中で聞かされる町の人たちの憶測を読むと、バンナドンナに対して、彼らには共通のイメージがあったことが見て取れる。

> All excellences of God-made creatures, which served man, were here to receive advancement, and then to be combined in one. Talus was to have been the all-accomplished Helot's name. Talus, iron slave to Bannadonna, and through him, to man. (15)

> ...asking no favours from any element or any being, of himself, to rival her, outstrip her, and rule her. He stooped to conquer. With him, common-sense was theurgy; machinery, miracle; Prometheus, the heroic name for machinist; man, the true God. (16)

以上の二つの引用は共に、町の人間が憶測するバンナドンナの鐘塔造りの動機であるが、前者について語り手はバンナドンナを「狂気じみた妄想に毒されている」と考えてもおかしくないというように解釈しており、後者については「醒めた理性の醒めた形式の枠内におさのまるもの」と解釈している。つまりバンナドンナの行為を狂気と理性がその根底にあったものとして捉えているが、どちらにも共通して言えることは、バンナドンナが完璧な機械をつくることによって「神」になろうとしていたということであろう。そして町の人たちがバンナドンナをある意味で神格化して捉えていたこともわかる。

> That which stirred them so was, seeing with what serenity the builder stood three hundred feet in the air, upon an unrailed perch. This none but he durst do. But his periodic standing upon the pile, in each stage of its growth - such discipline had its last result. (17)

塔が完成した際に町の人々はバンナドンナが地上から300フィートもの高さで手すりなしの止まり木に平然と立っているのを見て感動し、彼以外にそれをなしえるものはいないと考えた。しかしそのような行為ができたのは、毎日徐々に塔が高くなっていったことで、彼がその高さに順応していったからである。だが、町の人々はそのような理由があることを考えもせず、ただバンナドンナだから超人的な行為ができると考えたのである。つまり彼らはバンナドンナを無条件に英雄視していたのである。そして、バンナドンナが自ら作った鐘撞き人形に打ち殺された後でさえ、自分たちが英雄として

見ていたバンナドンナの呪縛から逃れられないでいる。彼らには国家を代表する英雄としてのバンナドンナしか見えず、目的のため狂気に駆られ殺人を犯したバンナドンナは視野に入ってこないのである。そして国家もバンナドンナの才能に敬意を表して荘重な葬儀を執り行う。メルヴィルは落ちた芸術家としてのバンナドンナを糾弾するだけではなく、バンナドンナの本質を捉えようとはせず、国家に盲目的に従っている人々をも批判しているとも考えられる。

Ⅳ

バンナドンナの作った鐘撞人形はある意味で完璧なものであったのであろう。彼の目論見通り一時きっかりにバンナドンナを打ち殺したのであるから。完璧に作動したものに創造主が不注意に打ち殺されたのは皮肉であるが、そこにはどんな完璧と思われるものを作ろうが、人間は神にはなり得ない、人間には限界があるのだというメルヴィルの警鐘が込められているように思われる。もしバンナドンナが完璧な奴隷、人類の完璧な奴隷を作り上げたなら、奴隷が主人の命を奪うことはなかったはずである。機械は機械でしかなく、魂を入れることなどできないのである。

バンナドンナ葬儀の際、例の鐘が機械ではなく人間の手によって鳴らされるが、鋳造の際撲殺した職人の肉片がもとでできた傷から亀裂が発し、鐘塔からころげ落ちてしまうが、この場面はこの作品の象徴とも言える箇所であろう。国家の威信をかけて鋳造された鐘が国家に顧みられなかった、ちっぽけな一存在によって崩壊させられたのである。そして鐘をたたいた農民が力を入れすぎたのが原因であったというのも皮肉である。国家の威信である鐘を崩壊させたのはことごとく人間だったのである。

> It was from observing these exposed bells, with their watchmen, that the foundling, as was opined, derived the first suggestion of his scheme. Perched on a great mast or spire, the human figure, viewed from below, undergoes such a reduction in its apparent size, as to obliterate its intelligent features. It evinces no personality. Instead of bespeaking volition, its gestures rather resemble the automatic ones of the arms of a telegraph. (18)

この引用は町の人々がバンナドンナが最初に機械仕掛けの鐘撞人形を思いたった時の様子を述べたものだが、バンナドンナは人間には人格があるということを見失っている。それゆえ職人を殺すことができたのである。人間を人間として見なくなり、人間以上のものを作ろうとした者が、結局自分が顧みなかった人間に滅ぼされるのである。メルヴィルは人間の心を失い機械を作ることによって神になろうとした人間の愚かさを訴え、19世紀中葉の機械化が進んでいるアメリカにおいて、一番尊重されなければならないのは人間であるということをこの作品で語りかけているのである。H.B. フランクリンは、産業革命が重商主義的資本主義を産業資本主義へと変え、産業資本主義は植民地を必要とし、その植民地を獲得するための手段を提供したとしたうえで、メルヴィルを19世紀における最も声高な反帝国主義作家としている(19)。メルヴィルは初期の作品で、白人の文明人が南国の島に住むいわゆる「未開人」や「野蛮人」を奴属させようとするが、バンナドンナが無名の職人を殺し、それを国家が不問にするのは、まさにこれと同じ構図と言えよう。

メルヴィルのこの作品はルネッサンス期のイタリアを舞台にしてはいても、19世紀の機械化が急速に進行し帝国主義へと向かいつつあるアメリカへの警鐘であり、それはそのまま現代のアメリカへの警鐘となっているのではないだろうか。

●注

（１） Herman Melville, *The Piazza Tales and Other Prose Pieces 1839-1860*, (Evanston: Northwestern University Press, 1987), p.269

（２） R. Bruce Bickley, Jr., *The Method of Melville's Short Fiction* (Durham: Duke University Press, 1975), pp.96-97

（３） Bruce L. Greenberg, *Some Other World to Find* (Urbana and Chicago: University of Illinois Press), p.177

（４） Melville, p.174

（５） Melville, p.187

（６） James E. Miller Jr., *A Reader's Guide to Herman Melville* (London: Thames and Hudson, 1962), p.165

（７） Gerald M. Sweeney, *Melville's Use of Classical Mythology*, (Amsterdam: Rodopi N.V., 1975), p.162-163

（８） Melville, p.174

（９） Melville, p.177

（10） Melville, p.178

（11） Melville, p.175

（12） Melville, p.175

（13） Melville, p.176

（14） H. Bruce Franklin, "From Empire to Empire: *Billy Budd, Sailor*, Herman Melville Reassessments (London: Vision Press Limited, 1984), p.203

（15） Melville, p.184

（16） Melville, p.184

（17） Melville, p.174

（18） Melville, p.183

（19） Franklin, p.210

●参考文献

スチュアート・ブルシェイ

1980『アメリカ経済史』日本経済評論社

折島正司他編　1993『文学アメリカ資本主義』南雲堂

牧野有通　1996『世界を覆う白い影』南雲堂

中央大学人文科学研究所編

2000『イデオロギーとアメリカン･テクスト』中央大学出版部

Leo Marx,　1964 *The Machine in the Garden*　Oxford University Press

Jey Leyda,　1969 *The Melville Log*　Gordian Press

William B. Dillingham,

1977 *Melville's Short Fiction*　The University of Georgia Press

●英文タイトル

The fall of the bell-Tower - an essay on Herman Melville's "The Bell-Tower"

●英文要約

The purpose of this essay is to reveal Melville's criticism of the machine-civilization and the imperialism of United States in 19th century.

The state Bannadonna lived in decided to have noblest Bell-Tower in Italy and he was assigned to be an architect because of his firm resolve. He was a great artist as well as splendid architect, but became arrogant under the protection of the state. He even killed a workman who was shrunken by the unleashed metals. The state, however, overlooked the homicide because the casting of the bell was deemed the triumph of the state. Bannadonna ended up being killed by the bell-striking machine he created and the tower fell down.

Many critics regard this story as a Hawthorne-like allegory and as the punishment for man's arrogance, but this story involves other important meaning; Melville suggested the fall of the bell-tower is the gross injustice of the sacrifice of humanity for national progress and prosperity. In 19th century, thanks to the progress of the machine-civilization, the United States, having fulfilled its manifest destiny, conquered the continent, which Melville criticized in this story.